「大規模都市公園の役割と展望」特集にあたって

Development and Future Prospect of Large-scale Park

特集企画担当編集委員 舟引 敏明

特集の趣旨

1972年に都市公園等整備五ヶ年計画が創設され、その中の重点項目として大規模公園が位置づけられた。引き続き1974年に、首都圏での最初の大規模国営公園である国営武蔵丘陵森林公園が開園し、大規模な都市公園の姿を現実のものとした。さらに1977年の緑のマスタープラン制度の創設により都市公園の計画的な配置が進められるようになった。この中で大規模公園も計画的に位置づけられることとなり、以後大規模公園の整備が急速に進められることになった。これは、都市住民のレクリエーションの場を都市近郊に確保するという役割を持つばかりでなく、それまで大都市圏整備計画に基づく近郊緑地保全地区等で守られてきた都市近郊林を積極的に公園として確保する役割を持つ大きな転回点でもあった。

大規模公園はおおむね50ha以上の規模を持つ都市公園で、主に国が整備する国営公園と都道府県や大都市が整備する都市公園がある。大規模公園は、その規模の大きさから様々な自然資源を包含するとともに、大規模イベントをはじめ多岐にわたる利用者のアクティビティを容認することができる。この点で、それまで進められてきたコミュニティタイプの都市公園と性格が異なるため、我が国の公園緑地整備の中で独自の役割を担うこととなり、長寿社会を迎える今後も福祉との連携などその役割はますます増加していくものと予想される。また、その計画・整備には多くの時間と費用を要し、地域経済振興の視点といった観点での整備効果も見逃すことはできない。

一方で、大規模公園の整備については近年急速に進められてきたため、その効果、役割については、行政関係の資料を除き総括的に報告された例は少ない。本特集では、このような大規模公園のこれまでの実績を探るとともに、果たしてきた役割を改めて整理し、今後の展開方向を探ろうとするものである。

特集の構成

本特集では大規模公園の持つ全体像を理解いただくこと

を目的に、大規模公園を巡る様々な局面を紹介しようと試みている。

1) 最初の4編は総論である。

まず、大規模公園計画の視点について計画論の観点からと緑地保全の観点から論じ、さらに大都市圏計画と大規模公園の関係を論じている。次に、大規模公園の嚆矢となった国営公園についての実績と展望について論じている。

2) 次に、大規模公園の効果や役割についての各論である。

最初に、大規模公園のもたらした効果を見るために、様々な国家的イベントの舞台となった大規模公園の役割について、そして大規模公園が地域経済にもたらした効果について論じている。

さらに、ランドスケーププランナーの視点からの設計・計画の特色とあり方について論じている。また、大規模公園の開設に伴いその役割が大きく変化した大規模公園の管理手法について論じている。

3) 第三は具体的な事例の紹介である。

国営公園における環境教育について、県レベルにおける大規模公園の配置計画の事例、県が整備した特色ある大規模公園の事例等を紹介している。

おわりに

紙面の関係から、大規模公園の持つ様々な側面を概観するにとどまっているが、大規模公園の持つ全体像と新たなランドスケープのフィールドとしての大規模公園の可能性をご理解いただければと考えている。執筆いただいた方々に改めて感謝を申し上げる。

大規模公園の規模の大きさは、緑地保全、レクリエーション、そしてまた新たなアクティビティを許容するものであり、これからの進め方次第では我が国の大きな未来への資産となりうるものである。その意味で、会員の今後の大規模公園への積極的な関与と関心を喚起する一助となれば目的の過半は達したと考えるものである。